

# 令和4年度学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の取組
1 生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、毅然とした指導で、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	① 挨拶を含めた所作の指導を、S・T・授業・休み時間、「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	88.1%  判定B	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で88.1%となっており、7月調査に比べて5.2%減少した。この数値自体は悪くないが、2年生においては11.4%もの減少は憂慮すべき問題であると考え。機会をとらえて挨拶について指導していくこと、教職員が率先して挨拶をしていくこととともに、「遅刻ゼロ挨拶運動」の内容を見直し、一部の生徒だけではなくすべての生徒が率先して挨拶をする機会をつくりたい。
	② 望ましい服装容儀や規範意識の向上に対して全教職員が授業や学校生活全般、「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声をかけをしている教職員が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	88.2%  判定C	服装容儀や規範意識を高めるため積極的に声をかけを行っている教員が前期は100%だったが、11.8%減少の88.2%となった。これは、今年度の服装容儀指導の際に、すぐに整髪することができない場合に「経過観察」という措置をとらざるを得なかったことで、他の教職員に頭髪指導に関する戸惑いを与えてしまったのではないかと考えている。教職員は、前回調査にあるように生徒の様子を注意深く観察し、適切に指導しようとしているので、生徒指導課が明確な指導方針、基準を提示し、周知することで、意識が改善されるものと考えている。
	③ 規則正しい生活習慣と時間を守ることを指導することで、遅刻の減少に努める。特に朝の始業5分前に着席するよう強く指導する。	3回以上遅刻した生徒の数が、 A 30人未満。 B 30人以上35人未満。 C 35人以上40人未満。 D 40人以上。	52名 (12月末現在)  判定D	12月末の時点で目標を大幅に下回る結果となった。遅刻の要因は生徒自身の生活リズムの乱れである場合が多いと思われる。しかし、中には時間を意識した行動が苦手な生徒、学校に適應できない生徒、人間関係に悩む生徒もいると思われるため、遅刻した生徒に対して一律の指導を実施しても改善しないと思われる。現行の反省文に加え、生徒の実態を把握した上で生活や睡眠に関する助言をしたり、悩みに対するカウンセリング等を含めた指導を実施していきたい。
	④ 「生徒チェック用紙」を活用し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	86.9%  判定C	7月調査より4.5%増加し、86.9%の生徒が「いじめがなく安心できる学校である」と回答した。生徒指導課では「いじめ問題」を最優先事項ととらえ、いじめアンケートだけでなく、いじめ不登校問題対策委員会等で早期発見、早期対応に努めてきたことが、若干ではあるが評価の向上につながったと考えている。今後は、生徒が安心できる学校となるよう、日頃からの観察に努めるとともに、教職員間の情報共有、生徒に対する望ましい態度、言葉遣いに努めていきたい。また現在行っている「いじめアンケート」「いじめ不登校問題対策委員会」は継続して実施していきたい。
	⑤ 学校の環境美化に積極的に努め、校舎内外の環境美化も取り組むよう指導する。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	81.1%  判定C	アンケート調査の結果、校舎内外の環境美化にも積極的に取り組んでいると回答した生徒は全体で81.1%となっており、前期より0.8%減少し、C判定となった。次年度は、1・2学期に6回実施の「鶴高クリーン作戦」を継続するとともに、整備委員による昼休みの放送やポスター掲示により、全校生徒への環境美化に係る意識を高める等の啓発活動を行うことで、校舎内外の環境美化に努めていく。
学校関係者評価委員会の評価		挨拶については、以前に比べ元気のよさがなくなったり、生徒によりバラつきが見られる印象を受ける。鶴高生としてのマナーの基本は、元気の良さと爽やかさであり、コロナ禍以前のように、元気のよさや礼法への指導を強化すべきである。遅刻数が増加傾向にあるが、遅刻する生徒には様々な実態があるはずだ。反省文や保護者召喚等とおしたこれまでの紋切り型の指導のみならず、スマートフォンの長時間使用から生活リズムが崩れ朝起きられない生徒、「学校がおもしろくない」、「授業が理解できない」等、学校に魅力を感じることができず登校が億劫になっている生徒等、個々の実態に応じた支援が望まれる。そのため校内指導、支援体制の拡充を図るべきである。頭髪や服装の指導については、学校規律の維持や規範意識の涵養、求人企業先・地域住民への印象等という観点から、校則で一定のルールを定めることは必要であるが、特に頭髪指導については、意義や必要性を生徒や保護者が納得した上で指導を行うべきである。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		挨拶で相手への敬意・親愛の意を示すことで、対人関係や社会生活を円滑にするという意義を再度、植え付けるためにも、集会だけでなくあらゆる機会を通じて指導を強化していく。特に、次年度は創立80周年記念式典や関連した催事も行われ来校者も増えるため、本校生徒の日常の姿を発信する絶好の機会となることから、挨拶以外の爽やかさ、元気のよさ等、鶴高生としてのマナーについても積極的に指導を展開していく。遅刻指導については、教育相談室、保健室、学年団と連携を強化し、より多面的に遅刻の原因分析や具体的な改善策等の支援を強化し、遅刻者数の減少を目指す。頭髪指導については、生徒の風紀委員会活動や家庭、職員への丁寧、細目な情報提供により相互理解の姿勢がとれるよう、より望ましい指導の在り方を検討していく。特に、男子で禁止しているツーブロックの髪型は広義すぎて分かりにくいいため、具体的なサンプル写真を提示する等、明確かつ丁寧な指導を展開していく。		

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の取組
2 生徒が安心して学べる授業づくり(授業のユニバーサルデザイン化)を推進するとともに、家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	① 様々な背景や問題を抱えた生徒を理解するために年5回の面談週間を設け、学年や教育相談委員会で得た情報を、学校外からも助言を得ながら、教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	個々や集団に応じた授業を行うために、担任や学年団・教育相談などと生徒情報を相互に共有している教職員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	94.1%  判定B	2学期になると生徒一人一人の様子が見えてきたこともあり、前期よりも生徒の情報を共有している教員の割合が増加している。 中学校からの情報の共有を強化して、1学期から担任や学年団等と連携を図り生徒情報を共有し、学習指導をしていく必要がある。
	② 話し合い活動を中心とした生徒が主体的に参加するための授業力の向上を図る。1人一台端末の利用を勧め、実践例を共有し活用を促す。各教科で主体的・対話的で深い学びの計画・実践・改善を行う。	発表や話し合い活動など積極的に授業に参加した生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	82.8%  判定C	前期調査の80.1%より積極的に参加した生徒の割合が2.7%増加している。学年別でみると3年生が87.2%と他学年より高い割合になっている。 1年次より発表や話し合いがしやすい人間関係を作ったり、スキルを磨いたりすることで積極的に参加する生徒を増加させていきたい。
	③ 個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自尊心を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A 5名以上 B 3名 C 1名 D 0名	3人  判定B	国公立大学では、学校推薦型選抜入試で名桜大学に1名、KUGS特別入試で金沢大学に1名、後期日程で富山大学に1名、計3名が合格した。他、一般選抜の学力試験による受験志望者が10名と大幅に増加した。昨年度の反省を踏まえ、早期から受験対策、冬季の補習期間の延長等が要因と考える。 次年度でも、一般選抜に照準を合わせ担任・チューターによる指導を強化し、各自の進路実現を目指したい。さらに、学科試験対策だけでなく、生徒の探究活動等が生かせる進路選択を早くから検討する必要がある。
		3月末の就職状況において、就職希望者の内定率が、 A 100% B 95%以上100%未満 C 90%以上95%未満 D 90%未満	100%  判定A	ほぼ第1希望の企業への就職を果たすことができ、12月中には就職内定率100%を達成できた。また、公務員試験にも5名も合格し、例年に無く好調であった。 求人件数は部品加工・電子部品製造メーカーを中心に好調だったが、女子数名が希望していた食品系製造や食品販売職が昨年同様に少なく選択に苦労していた。次年度は同職種での求人の開拓に鋭意努力する。 次年度も不測の事態が起きることも想定しながら、早期に内定が果たせるよう心がけて指導にあたっていく。
	④ 家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A 60%以上 B 50%以上60%未満 C 40%以上50%未満 D 40%未満	57.0%  判定B	前期に比べ、家庭学習の時間を確保している生徒の割合が大きく減少している。2学期になって学習への意欲が減少していることが要因と考える。 個々のレベルに合わせて取り組める課題などにより自己肯定感や達成感をより高めていくために、ICTの利用など生徒が取り組みやすい方法を考える必要がある。
	⑤ 情報科、商業科における各種検定・資格取得を推進するとともに、より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等、指導体制の充実を図る。	学年及び各教科が目標とする各種検定資格に対する取得率が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 ※合格者数/受験者数	商業検定 53.0% (1月現在)  判定D	商業検定結果は、1月末現在、ビジネス計算実務検定1級48.6%(18/37)、2級56.3%(18/32)、3級55.2%(16/29)、ビジネス文書実務検定1級23.1%(9/39)、2級49.4%(40/81)、3級68.0%(66/97)だった。 各資格に関する興味関心を引き出し、努力することの大切さや達成感を持たせ上級資格へ繋がるような指導を継続していく。
⑥ 学校図書室の取組を活性化し、積極的に読書に取り組みせる。朝学習で読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	図書室での年間貸出冊数が、 A 1、400冊以上 B 1、200冊以上1、400冊未満 C 1、000冊以上1、200冊未満 D 1、000冊未満	628冊 (12月末現在)  判定D	昨年度の同期より約100冊減少している。 借りる生徒が偏っているため、朝読書の実施により学年や部活動と連携して一度は借りる機会を設け、活字に触れる機会を増やす必要がある。また、長期休暇前の授業やLHを利用して図書館の利用や貸出を促すようにしたい。	
学校関係者評価委員会の評価	家庭学習の時間確保については、前期は高評価となっていたが、後期は低調な数値となっている。年間をとおして切れ目のない指導を推し進めていくべきである。GIGAスクール構想の運用等、戸惑いもあるかもしれないが、生徒のより主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組み、学力保証に努めてほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	習熟度別や少人数での授業、個別指導、学校行事等、様々な場面で1人1台端末を活用した実践も増えてきたが、この実践事例を教科内にとどまらず他教科にも共有し、授業の質的向上に繋げていく。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び今後の取組
3 教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携・共同した活動の推進で、地域や保護者から信頼される学校づくりに努める。	① 中学生やその保護者に対して従来のホームページに加え、新たにSNSアカウントを設置・運営し、学校行事や部活動の大会情報、日常の学校生活等をよりタイムリーに公開することで、本校への理解を深め志願者の増加をめざす。	SNSアカウントのフォロワー数が A 500件以上 B 400件以上500件未満 C 300件以上400件未満 D 300件未満	543件 (1月13日現在)  判定A	県内の高校において先取的な取組である中で、学校の様子と生徒の活動のみでフォロワー数が500件を上回り、認知度の高さがうかがえる結果となった。実際に、現役中学生や卒業生、地域の方からも、学校生活や生徒の様子が分かりやすくて良いという声を多く聞くことができた。 HP閲覧数は、前期で例年を大きく上回るも、後期では伸び悩んだ。しかしながら月平均15,349件と高い数値を記録している。後期のやや少ない数値は、Instagramの閲覧によるものとも思われる。 情報発信の成果として、体験入学や学校説明会(今年度より実施)への参加者増、推薦入試のスポ科志願者の大幅増(昨年度3名→今年度10名)に繋がっている。これからも効率よく学校の様子などを伝えていけるよう、創意工夫していきたい。
	② 「総合的な探究の時間」の「地域探究」をとおし、生徒が地域社会における課題に気づき、その問題の本質を考え、解決方法の検討、協力団体からの検証に取り組む学習活動を充実させていく。	「総合的な探究の時間」の地域探究の活動において、地域と連携・協働した活動に積極的に取り組むことができた生徒・教職員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	生徒:31.3%  判定D  教職員:67.7%  判定C	活動に参加したと感じている生徒が少なく、特に1年生の割合が30.3%と低い。1年生前半は概要説明や探究活動の基本を習得する時期であり、今後行う予定の就業体験や地域探究活動を通して、地域と連携する実感を持つようになると考える。 3年生においても、進路先決定後に地域の課題に向き合う活動を行う予定である。
	③ 生徒・教職員・保護者が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動、エリアクリーン活動等を通して、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	学校行事や課外活動において、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員・保護者の割合が、 A 70%以上 B 60%以上70%未満 C 50%以上60%未満 D 50%未満	生徒:43.9% 判定D  教職員: 67.6% 判定B	活動に参加したと感じている生徒が少なかった。特定の生徒や教職員のみが諸活動に関わっていることも数字が低くなった原因と考えられる。 今年度は用水路沿いに水まき用の長いホースを設置し負担軽減を図ったので、引き続き、花いっぱい運動の水やりを全生徒が関わるように指導していく。 また、地域探究会の取組はジオパーク関連を中心に生徒全体に知ってもらえる取組ができた。地域と連携した活動はコロナ禍ゆえの制限も多いが、地域探究会や各部活動を通して今後も促していきたい。
4 教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	① 各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、毎月の業務の流れの中で先を見通し、区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	毎月2回設定されている定時退校日を意識し、実行することができた割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	70.6%  判定B	定時退校日を意識し実行できたとする職員の割合は、前年同期比14.0%増の70.6%と堅調な数値となったものの、80時間超過者推移でみると、減少したのは6月(2名、同比1名減)のみであり、4月8名(同比3名増)、5月2名(1名増)、9月1名(1名増)、10月3名(3名増)と増加している。また、45時間以下の者でも58.9%と前年同期比3.7%の減少に留まっており、月全体でみると、改善に至っていないことが分かる。 学期始めや部活動の大会期間等の時期では、依然として超過勤務状態にあり、職員会議日における短縮日課の設定や定時退校日の呼びかけ強化等、改善を目指したものの実現には及んでいない。 次年度は、月2回の定時退校日に特別な事情で退勤できなかった職員に対して、割振日を別日に設定し確実に遂行してもらおう。これにより意識改革をより徹底していくとともに、各種会議・打合せ会の開催の精選、運営の効率化を図る等、より強固な遂行体制の整備に努めていく。
学校関係者評価委員会の評価		HPやInstagramの細目でタイムリーな配信により、外部の方が学校生活を知ることができ、実際に鶴来高校生の話題をよく聞くようになったので、今後も継続していくべきである。定員確保のためにも、進学実績やきめ細かい指導体制、舟岡寮の所有等を受験生や中学校のみならず保護者に発信する工夫や仕掛けを図っていくべきである。 地域に暮らす住民としては、校内にとどまらず、校外へ出て積極的に地域住民と関わる機会を作り出してほしい。「鶴来にあるだけの高校」というだけでなく、鶴来になくてもならない高校として、存在意義をより高めていってほしい。 教員の多忙化改善もあるので、授業や部活動以外での業務も多く大変だと思うが、生徒が頑張る場所でもあるので、外部人材の活用等、教員の負担を減らしながら、活用の場を維持できるような体制づくりを整備していくべきではないか。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		コロナ禍の行動制限も徐々になくなりつつあるため、各種活動を復活実施し、Instagram、鶴高通信、各種の報道媒体により本校の特色や魅力を中学生やその保護者、地域住民への発信を継続していくとともに、従来の地域イベント等の公演活動に加え、運営スタッフ等として参画する体制づくりを整え、より活動の幅を広げていく。		